4K-18

912.4
Ti238n

戲曲叢書

長町女腹切

渡鯉出世瀧德

9124 Ti 238 n

帝国図書館蔵

帝国図書館
29.7.22

337114

長町女腹切

近松門左衛門作

元禄十三年正月六日初興行・作者四十八歳

例の童の言の葉に言よる品もよし蘆の。難波の京の物語今の狂歌に取りなせし。京童の口吟落首洛外とりく〳〵に。その一節と繪双紙や。下立賣と堀河へ引廻したる角屋敷。刀屋石見何某とて諸役御免の受領職。折紙太刀の御用迄御所は勿論屋敷方。男たる身の魂の御刀脇差拵請取所と大看板。見世は弟子に打任せ。誰が下人やら頭やら。咄し目貫の性よしもつい燒つけて悪性に。身と研ぎへらす奉公や跡のこしりの帳面の。つばめ合せと親方が鞘鳴するぞ道理なり。主人石見は禪門の白い天窓に黑眼。仕事場と見廻つて。ヤア巳が足音聞たやら皆細工に精が出るよ。煙草ばかりが仕事じやないぞ。彼岸過たりやめつきりと日が短のい。夜仕事さしよにも此油の高さでゝ儲ける程皆戻るゝ戻る次手に戻橋の鍔ゝ戻つたの。一條の御所樣の菊鍔も。九月の御用じや合點の。黑鞘が出來たらば烏丸殿へ渡しておじや。二口屋のはみ出し猪熊の革づゝの。なせに遲いと毎日二三度使が走る。腥井の親粒もまだ入れてやるまいな。三條小橋の下細工菖蒲作りの拵も。五月からの誂へ何として出來

ぬぞ。長刀直しと研だらば辨慶山の町へ持て往け。兩替町の銀作り御池の町のふち頭。小川通りのせのいらぎ今日明日に持してやれ。さつさに來せた下の町の酒屋のうみ。入婿が入る引出物にしたいが。娘が望む道具じやと大切先の大刀物。身ばのり買ふて去れたれ後家鞘に極つたと。堅い親仁の輕口も刀屋とてや古身なり。重手代の忠二郎旦那の前に帳面扣へ。左介喜八は算盤のさゞんの九月節句前。算用の高見合して。ナヲ此半七の大のらめ帳面も埒明ず。今朝のら爰へ頽出しせぬ何所へうせた。又祇園狂ひの宮川町か繩手の。朋輩共が知つてれろ詮索せいと喚かるゝ。イヤ半七ハ昨日のら頭痛するとて鉢卷で。小座敷に寢て居まする。なんじや頭痛じや。若い身で又してハ頭痛のつゝのへの何のとは皆茶屋酒が過るのら。粥でも焚いて喰いしたの。アイ粥の事は扨ときふも湯も咽へ通らぬと云ふて。やう〳〵と今朝酒の畑して飲んで見て。どふでも色のない酒ハ飲まれぬと。苦い顔しながら中椀にたつた三杯と。云へば主も興さめて。此る心も拍子ぬけ笑ひ暮せし秋の日の。西山近き染浴衣愛宕参りに袖と引れた。是も仇なる世の勤め。四條の水に名と流し。身の憂數と積あげし石懸町の井筒屋のお花。よ盛り戀盛り。身と賣品ハのはれども。刀屋の半七と深い中ごと正銘の。互の誠とぎ入れて締た心のもろひねり。其柄糸のほつれそめ。我親ざめの情なさと。問ひ談合も中絶し。いとし男も親方がゝり首尾はどふぞと案じほれ。顔の見たさも遣瀬なく鵲籠舁雇ふて草鞋がけ。浴衣と假の旅出立。ぼんぼり綿もひねくろしく。背中に皺の寄るべなさ。石見の見世へ頼みませふ。〳〵こりや且那さんで御座りんすの。内方に居さんす半七殿に。一寸逢いたふ御座りんそ。親方ぎよつとし。はていのふりんす〳〵と云ふ女子じや。和女ハ半七が女房か。ハテつがもない私ハ大坂者。半七が伯母で御座りんす。アレまだりんすじや。ムウ大坂の伯母御とハ。伽羅細工の甚五郎の内儀の。ア、伽羅〳〵何のお禮にとふ參る筈なれ共。主ハ細工の人だのら貧な世帶の隙なしで。今日迄の御無沙汰大事の甥が出世の門。祝ひ月と心掛愛宕のけての登舟。乘合の窮屈さとろ〳〵と寢よとすりや。後のらせゝるやら。前のらハ毛の生へた。大きな足と突出すやら。齒切とするやら寢言やら。可笑いことの數々は山崎のら連もあり。あがつてお山と一息に嵯峨へ下たりや仕合と。釋伽樣の開帳の相伴やらおこゞやら。旅籠屋で支度して。直に是へと出次第の口は手管に馴々しく。皆樣御免ゞしんどうと腰かけて。煙管取手も粗略に。皆樣半七の朋

躍衆の。しんくな仕事で御座りんす。繻子の肌着に色さらしなの。伯母と名乗て刀屋に見するい迂散物なりし。ソレ喜八伯母が逢に登られたと半七に知らせてやれ。誰ぞ茶と進せぬが幾人おつても氣が附ぬと。云ふ内に半七はそつと起て障子のすき。覗けば馴染のお花なり南無三寶扨は内々苦勞にした。慾づらの繼父めが年切増のもがりでと。急々にせがむと見へた。其工面に來たそふな。何にもせよ出過ぎたこと。逢も危なし逢はぬも又。仕舞の附ぬ我身ぞと。夜着引被り生たる心地いなかりけり。親方は正直一へん半七いなせ出ぬぞ頭痛でまだ起られぬか。他人では無しなふ伯母御。寢所へいて逢はつしやれ。お山狂ひで酒やら何やら過る故。煩ひ暮して物も喰はぬ少意見して下され。そりやそこへ案内せいと。下地は好よ据る膳甘ひ首尾とぞ成にける。やゝ時過て是も又愛岩參りの花お札。風呂敷包下人に持せ。刀屋の石見樣とはこなたの。大坂甚五郎が女房半七に逢ひたい。伯母が來たとふつしやれて下されと。云ひ入れば家内の上下愕然して。ヤこりや何じや門にも伯母内にも伯母。騙子か狐に極つたと。不審かるやら怖がるやら。中にも亭主い一理屈さは〳〵と囂い奥へ聞へりや詮議がならぬ。默れ〳〵と小聲にて表の伯母御通らしやれ。爰へ〳〵と云はるゝにぞ綿帽子取て從客に。是はまあ〳〵結構なるお内方ついしの御出入申さねば何方樣が誰樣やら。コレ其所な前髪殿盆一枚貸つしやれ。私が事なりや心迄奥樣へ上まするひの上の切荒布花の都へこんな物。お耻のしやと差し出す。伯母の年ばい格好と見ればどこやら面相も。半七によく似たり扨い奥なは似せ物めと。思へども念の爲。是い〳〵云はれぬこと。女房共は寺參り戻つたら見せませふ。してつきも鹽もなふ半七に何用有て登られたと。云へば伯母は打笑ひ。いや半七にさのみ用もなけれ共。旦那樣へ少お頼申事。連合甚五郎登らるゝ筈なれ共。お屋敷方の御用は多し飛脚でも如何とて。扨私が登りしと下人に持せし風呂敷より。棒鞘の一腰と取出し是は是信國とや。去大名の若殿へ藏屋敷のら上らるゝ。大切な拵物大坂にも彼是と職人衆も多けれど。京細工と申甥子が爲。内方へ頼みます注文は此通。さぞ方々の請取御忙しいは存ながら。どうぞ近々に頼上まする。此次手に半七めが顔も見たさ。何やこのやに登りましたと差出せば。石見は脇指注文見合。是い此方の商賣。心得たとずつと立て是伯母御。戀しがらるゝ甥がさまと見せませふ。暫く其處にと云ひ捨て思ひ掛なき一間の障子。蹴破つてつゝと入る。二人いはつと驚いて。狼狽

廻る胸ぐら両手に掴んで。ヤイ半七のいきすりめ。よふも〳〵親方と踏附たな。あの女が來た時のらでざりんすが呑込まれぬ。りんすの正体顯れた。お山やら惣嫁やら厚皮頑な畫日中。大坂の伯母で候と目利の家へ似せ物と。ぬく〳〵と寢所へ迄手引させ。主に一杯汝めは甘い所と喰ふたな。親代々の刀屋と太鼓持にするのみの。座敷と揚屋に仕くさつたお禮申と突倒し。ゑさし掃退取てさん〳〵に打敲く。伯母は此体聞よりもはつと人目の耻のしさ。憎うもあれど甥子が難儀思ひやられて何とがな。此場の首尾とと氣と碎く。半七花は身の科と云ひ包めんと眞顔にて。申々旦那樣。お氣が違ひはしませぬの。私は兎も角も伯母者人と打擲あり。必後悔なさるゝなと云はせも果す。ヤ盗人猛々敷く其姿になつてさへまだ惣嫁めと勞はるこの。主の身代空になし天道とがすめとる。ヤイ天罰と云ふもので大坂の伯母が登られた。目の前へ連ていて敲き殺して腹とゐる。ヤうせぬのと杖振上はた〳〵と打つ音に。伯母は悲しく走りより旦那樣暫らくと。取附ば振放し縋りつけば突倒し。とこのふする間に思案して。ヤヤ、こりやお吉か。そなたは此所へどふして來た。コレ申し旦那樣。あれは私が妹と云へば旦那は興さめ顔。半七は猶合點せず花はさよろ〳〵狼狽る。袖と扣へて コリヤ妹。ヤイお吉是姉じや。姉が顔と見忘れたこの狼狽者と睨つけ。目まぜで知らすればやら〳〵と心附。ハテほんに姉樣。姉樣〳〵じやと云ふ聲慄ふ斗なり。伯母は色目と曉られじと。五條の木賃宿へ行きはせで。姉さへついど來ぬ内へ騙子らしいこと。云ふて來た故にこんなこと。旦那樣のお山じやと御覽じたも御尤。今日も愛宕で私とお袋とはこの云ひませぬ。それも道理じやあの人は腹がはりの兄弟で十五違ひ。半七が爲には伯母なれど。年は甥より二ッ下伯母甥の好とて。親うすると知らぬ目で。女夫と見るに咎はなしと。非の入りそふな事ともと。云くろめたる情の程。二人はあつと嬉しさも夢に夢見る如くぞや。主の石見まんまとくひ。ムヽ二人ながら伯母御の。よい年して不調法過まつた免してもらと。伯母御怪我は無つたのと脊中按れば彼方向く。ヤヽ若い人の道理〳〵。そちらな伯母樣賴みます機嫌取て下され。是半七。言分してくれともじ〳〵と勝手へ出。皆の奴等うつのりとなせ茶漬でもして出さぬ。腹の立た揚句じやにけんどんと取〻に遣れ。ヤテ盃と出してとけむつのしのらふ己は出見世へいてゐるぞ。はれやれ腹の立つ勢ひ口に。伯母とも知らいでみしらしたと足早にこそ出にけれ。跡見送つて半七は。伯母の前に手と仕へ何にも態と申

ませぬ。面目ないと有難いと胸は二ッに裂けそと。侮み歎けばお花も涙に染々と私は四條石懸町。井筒屋と云ふ茶屋に花と申す勤の者。半七様とは末々まで面倒見あふ契約に。ちといき詰つた愛ふしの談合に。逢いで叶はぬ事あつて横着な此有様。伯母様なら大事の甥と。唆のすとのお憎しみそこも許して下さんせ。いとしいが只因果ぞと共に詫ちて泣きければ。伯母も同じ涙にくれそふ見た〳〵。連合は大坂で伽羅屋といへば。町によい衆屋敷方。人に知られて世の憂無情。此伯母とても知つて居る。色事は若い役此上にどのやうな生る死ぬるの場になりても。厄体もない氣と持つまいぞ。世間多い心中も銀と不孝に名と流し。戀で死ぬるは一人もない。流れの身には取分けて。悲しいと酷いと。そこと死ぬが心中ぞや。眞實男可愛くば五度逢ふものと三度逢ひ。二度と一度になる時は親方も機嫌よく。戀に身とうつともない。二親もない半七伯母一人甥一人。元は知行も取た筋職人の弟子と朽果れど。可愛ひとも不便とも思ふ者は此伯母一人。末のけて頼みます。今日伯母が登らずば二人の命は有るまいもの。有難や忝なや愛岩參りの一驗。佛神のお蔭ぞと意見も親は泣寄の。二人が肝に堪へつゝ泣くより外の事ぞなき。伯母は重ねてやれ半七。泪ついでに今一度泣ねばならぬ此脇指。見知てゐるのと差出せば。半七棒鞘の柄引ぬき。鉄莖と見れば信國。裏目釘の穴際に風と云ふ字の一字銘。横手と拍て是は扨。我家の重代ぞや親の秘藏が年と經て。巡り來るも不思議なり二度武士に立返る。瑞相なり嬉しやと推戴く脇指と。伯母引とつてのらりと投げ。なふ情なのさふらひや。武士になれとて見せはせぬ此脇指故。家筋ののう零落た因縁咄。小耳にも聞きつらん。お花とやらも繋がる人。悲しい咄の一通りと聞てたも。もと我々は伊勢の龜山者。先祖は猪瀬文平とてあの子が爲には祖父様。お持砲の鉄砲大將百五十石取た人。おなじ家中に高木宮内とて。八百石取る旗頭互いに無二の中なりしが。上方のとりうりが此脇指と賣りに來て。諸朋輩の附合に祖父様も望みにて。買求めたい心ざし彼の高木も望とのけ。代物問へば三百貫の折紙。心安さの當座の座興。とは云ひながら高木が麁忽。文平お身の身代では高い物じやがお買るのと。ふつと云ひしも互ひの不運。苦笑ひにて一座は濟みその取沙汰の國一杯。いはれぬ猪瀬が齒も立ぬ刀物好して高知行の。高木殿と張合て人中で耻辱うけ。あれでも武士かと言囃す。此脇指と買いでは一分立ぬ祖父様の。武具馬具衣裝夜の物まで代なして。三百貫の折紙代

一倍まし。二百拾兩に買求め直に中心に一字銘。高木に勝との心にて風と云ふ字と彫記し明れば九月十五日登城の道に待うけ。高木遣ぬと聲とのけ尋常に討果せ。屋敷へ歸つて祖父樣は娘子供に暇乞。命に替し此信國必らず人手に渡さなと。お腹へぐつと押立て右の脇まで一筋に。唯一言の義に依て身上と果されたり。其方の父樣は伯母が爲には兄樣。その折しも江戸番直に江戸より牢人あり。永々の憂苦勞悲しい暮しが病となり。彌憂き其中にも遺言にて此脇指。乞食するまで離すなと藥も飲ず。祖父樣の第三年同じ月に病死ぞや。悲しいとも愛いとも。情なやお袋も又歎き死。跡に殘るは伯母と其方。まだ九ッの頑是なし伯母が心と推量あれ。三年に三人まで同じ月に死ぬると。不思議と思ふ氣が付て。刄物の相性見る人に目利して貰ひしに。祖父樣父樣同じ火性。刀は水の流れ燒以ての外の不吉の脇指。寸は一尺四寸五分けん尺は災難是と其儘持ならば。三代迄は祟るとある占に驚いて。捨賣に賣放し廻り廻つて十三年め。お屋敷方より此脇指拵へ仰付られて。孫子の其方の眼にのゝると。はや親方の打擲の難儀に逢ふも此不思議。武士羨山しと思やんな一言の咎より。親祖父の命と絶ち子孫まで零落しは。前世の業とは思へども。愚痴な心に淺ましい此脇指がないならばと。科ない刄物に恨が殘り折ても捨たい氣なれども。今では大名のお腰の物。家の敵の此脇指。主人の樣に撫擦るその時々の身過はど。悲しい物はなさぞよ。子にも甥にも唯一人。奉公大事に勤めてたも。いとしの身やと搔口說。膝に凭れて泣きければ半七も伏沈み。お花ものゝぬ身の上と語るも聞くも主の內。頷き合つ吁きの忍び泪ぞ哀なる。さうか〳〵咄してあれ見世さし時。伯母は直に伏見まで夜中でも舟はある。來年のお除には必らず下りや。此脇指の拵。注文の通り隨分急いで下してたも。旦那殿內方樣へ能樣に賴むぞや。お花女郎にも名んでがな。又頓てやと出ければ。イヤ私も東道までお供致しましよ。ア、折角來て素戻りか。これ半七伯母は粹じや。跡でしつぽりと咄しやいの。イヤく別に咄す事もござりませぬ。そんなら祝ふて口濡して去しや。イヤ最早お茶も飲ました。ハテ茶ばのりで濟むものの。しんこの樣な物なりと茶の子甥の子。のこ〳〵振舞や半七と。二人引寄せ寢所の障子の中に押入れて。伯母は氣とはり堀河通り。二條通りの高瀨舟。直に大坂へ下りける。

中の巻

長町女腹切

名は堅く。人は和ぐ石懸町。前には戀の底深き。淵に憂身とぼんと町。都の四季の月花と爰にとゞめて通路や。馴染〳〵の色遊びの。中にお花は忘れても。忘れがたなや刀屋の。半と深きつま戀に。なつく八ッぢの繼三味線。心くらべの連引に思ひの色と忍び駒。忍ぶに余る涙かな。浮氣鳥とそやされて。月夜も闇も此里へ。光滿寺と云ふ坊主客。お花に馴し鶯のはけきやうとも。念佛とも知らぬが佛の戸帳ぞと。井筒が暖簾撞木杖にてひらりと上げ。太郎内にゐ。四五日お目にぶらさがらぬ。ヱ、珍しいどつち風が吹たぞい。イヤくどつち風でもない。今夜はしよざいの無常風。沙汰はないと葬禮の戻り。ちよつと寄たし心はせく。どふせふの斯ふ燒香場と。ふいに遣てすて引導も何云ふたやら。不便や今日の妄者も碌な所へ往くまい。是もれ花へ心中と。雪の頬さき遠慮なく。毘口寄せて頼ずりは。山葵おろしにぬきの玉子。痛そな顔の痛々し。お花が浮ぬ顔付に火事も亭主も氣の毒がり。コレお花どふぞいのふ寺ならば大黒。爰ではわつさり恵比壽顔して見せましや。ヲ笑やいのと迫立れば。ヤ、太郎おだまり〳〵。あれは我等に甘へるの。腹立所が猶うまし。嗔州二階へ連ておじや。今夜は妓衆の惣揚見事なとの。古手の肴取といて滿燒一種で呑明す。

鰻四五本さのせに遣や。南無阿彌陀佛と騒ぎ立。皆々二階へ上りける。既に傾く宵月の夜もはや四ッ半七は。銀の才覺ならず者と。茶屋にはせのれ親方に見限られつゝ筒井筒。心の水もうへ干て流れ歩さにとぼ〳〵と。格子の影に身と潜めお花が便と待居たる。爰に誰とは白髮まじりさんか天窓に無用の灯燈。門口にてふつと消し。ヤア太郎左衛門樣お宿にの花めが父西陣の九兵衛でござると。たつみ上りに言ひければ。亭主夫婦ヤア親仁來ての。こちへ〳〵と茶釜の前太郎左衛門顔顰め。此頃段々云ふ通り。そなたが娘お花がと。そも〳〵小めろの時分のら手形の表丸十年。親方に損もかけず退付年季も明くどや。なれども勤のならい小間物屋の煙草屋の紙屋で候。呉服屋で候の。すのこんにやくのと借錢が今の金で七八兩。その上親仁も長者ではなし。あの子にかゝる身でないの。がらり廿兩ま一年切まし。居なりに居れば借錢も先其分。賣買高い此節貳貫目ぢのい廿兩。其方が手取に温まれば兩爲と思ひ世話やけども。この柄卷屋の半七と云ふ虫が差て。何の彼のと入性根お花が一切呑込ぬ。是のらは勝手次第。半七と云ふ職人の弟子爰らあたりの拂ひさへ埒明す。東ふさがりになつた者。打みしやいでもつぶ三文ないは知て居る。あの樣なごくどうと腐り

合たお花が行末流浪は知れたと。少さいのらの馴染なれば。よいと聞く樣にはござらぬ。どふぞ意見でも召れぬの。壁に馬乘のけては明べき埒も明ぬもの。前びろに手形しやう爲に呼に遣たと語りける。門口には半七聞けば悲しさ無念さの。格子の柱噛ひしぎ齒と咥しばり泣居たる。親仁は横手ちやうど打て。扨々苦々しい。親方殿にお世話とのけ不孝者と申そふの。その刀屋め知て居る。無頼者の大將拔被りの下地。ヤイ花めはどれに居る。爰へ來い用が有る。引ずりに往てお客の前で耻のゝそうかと。昔作りのつごと聲お花は八目の耻のしく。ヤイあの盃藤さんさよさん預かつて下んせと。言ふて降る箱階梯。ヤイ父さんの夜更て何しにござんしたと傍へ寄ると突倒し。ヤイ不孝者。親方殿お話しで一のら十迄聞屆けた半七めと云ふ騙子めと夫婦にしては。年寄た此親が鼻の下が干やがる。廿兩と云ふ金が天から降るか地のら湧の。あたりめが挨拶はらりしやんと切てしまひ。年切增て奉公するか否と言へ分別有り。サアくどふどやと腕捲り掴み付べき顏色なり。お花はつと胸塞がり暫し泪にくれけるが。なふ父さん朋輩衆は内證。客さん達の手前もあり。さもしい事と言はんする。勤する身の親達は。どの口聞ても可愛や親もへ苦勞とする。定めの年も近づく屆いた男と見定め。末の片附心がけ身と安樂にして見せいと。云はぬ親は御座らぬ。節季〳〵にせびらのし足いで又年と切まし。男に迄添せまいとはあんまり酷ふござんする。ほんの親より繼父は猶大事と嗜み。隨分孝行盡せども。こなさん私にみぢんも憐みはござんせぬ殺しなりと何樣なりと。分別次第にさあんせ。半七樣と挨拶切り勤はせぬと斗にて。人目も耻ず大聲あげ身と悶へてぞ泣き居たる。傍若無人の繼父冷笑ひ。よふ吐すな盜人の畫寢も當がある。汝が母に何の見込はなけれども。汝と賣て喰ふ爲女夫になつた。今の詞は誰が敎へた半七のすりめにならふたの。べり〳〵呰る頬げた蹴放いて仕舞んと。武者ぶり付と井筒屋夫婦。年の内はこちの物疵付させぬと捲放そ。思ふ男に添れぬのらは殺しや〳〵殺しかねふのと。掬合捻合大喧嘩破れのぶれと半七。裾引括げ井筒屋の庭へつの〳〵。拵卷屋の半七と聲とのけ。九兵衛と取て突のけ眞中にどつのと座り。コレ親仁。其方はお花が繼父そにつけ粉につけ憎いのも理り。此半七とすりの騙子のがんぞうのとは。いつ騙りした盜みした。半七が目には其方と人賣と見たもがりと見た。よし夫は兎も角もお花は已が女房すべい奉公仕舞ふては。繼父殿でござらふが。もがり殿でござらふが。主の

ある女房分別して物と云へと。せきくる顔の青澤叩き散して詰のくるゝ。刀屋の半七とは其方の。どれ顔見ようはれよい男の。江戸元結にしもす鬢天窓付は、兩替町、内證は曾我殿、見せかけ力身といてくれ。此年迄敗毒散一服飲ぬ此親仁。もすりはたべぬ、慮外ながら。親も許さぬ女房とは粟田口へ往きたいの。此娘女房に持てば小判がいるが合點か。小豆粒程な細金さへない樣で。なんじやお花と女房じや。いきがたりとは其事。いつそ手と能ふ巾着の屋尻切れとぞ喚きける。半七ぐつと急あげ。ムヨよふ云ふた小豆粒は持ねども小判と云ふ物持て居る。來年の給分廿兩渡すからはお花は身が女房と。紙入より金廿兩取出し。サア金でした小判と云ふ物近付になつてとけと。眞向に投つくる。ヤイ半七。あの娘はまだ五十年が百年が。顔に色氣の有る中は奉公さして喰ねばならぬ。千兩道具の娘と廿兩の目腐金で。女房に持ふやべのこまあなるまい。何所で盗んでうせたやら後の詮索喧しい。汝に呉ると投つくる。イヤ金貰はふ好みがない。汝に呉ると投返し。投つけ打つけ掴みあひお花ははつと泣出せ。太郎左衛門つゝ立。コヽ半七お花はこちの奉公人。親仁とのせりふなら何所ぞ外で仕たが能い。門には大勢人だのり客の邪魔して貰ふまい。それ男共追出せ心得太兵衛長兵衛五介。ばら〳〵と立のゝり。無理無体に引出す。お花はわけも正躰も涙ながらに取付と。どこへ〳〵と押分る。親仁と中の關守の雪駄片足になら草履。足にはたらぬ半七が髻と掴んで引立しは。目もあてられぬ次第なり。サア親仁も先歸つて諸事談合は明日の事ヘッア それもそふ然らば明日參りませふ。申までは及ばぬが。花めと敷居より外へ手放して下さるな。ヤイそこな不孝者。汝明日來てなんとする待ておれ。ヱ、息せい張て喉が渴くと。ごぶり〳〵と熱ばなの。茶びん天窓と振立て。河原と西へと歸りける。斯る哀の最中二階の階子ぐはた〳〵〳〵。戸ぐら坊主の佛頂顔。お花そこに何して居る。先の押への盃はいつの世に戻る事。惣体今夜は和女が顔浮々せいで酒が呑ぬ。氣と替て西石懸の關東屋で騷がふ。太郎山衆貸してたも。ヘア殘りの子供は西石懸が天竺へも。御同道お花一人は我等が内。手放しては内證に氣遣ありまの。いふな〳〵。皆迄云ふな湯のだんこの。湯治するなら遣ひ錢見事な事かと金三兩。衣の下より投出せば。是こそはんの忝け有馬の湯のだんこやれ、ものだんこものだんこ。今はあり、まのゆのだんこしよんがる。西石懸へと騷ぎける。同じ所も西側は。祇園丸山前にうけ。芝居の櫓暗き夜も。行のふ人の灯燈は月もおろかと

ある女房分別して物と云へと。せきくる顔の青疊叩き散して詰のくるゝ、刀屋の半七とは其方の。どれ顔見ようはれよい男の。江戸元結にしもす髪天窓付は、兩替町、内證は、曾我殿、見せかけ力身といてくれ。此年迄敗毒散一服飲ぬ此親仁。もすりはたべぬ、慮外ながら。親も許さぬ女房とは粟田口へ往きたいの。此娘女房に持てば小判がいるが合點か。小豆粒程な細金さへない樣で。なんしやお花と女房じや。いきがたりとは其事。いつそ手と能ふ巾着の屋尻切れとぞ喚さける。半七ぐつと急あげ、ムこよふ云ふた小豆粒は持ぬぞも小判と云ふ物持て居る。來年の給分廿兩渡すからはお花は身が女房と。紙入より金廿兩取出し。サテ金でした小判と云ふ物近付になつてとけと。眞向に投つくる。ヤイ半七。あの娘はまだ五十年が百年が。顔に色氣の有る中は奉公さして喰ねばならぬ。千兩道具の娘と廿兩の目腐金で。女房に持ふやべのこまあなるまい。何所で盗んでうせたやら後の詮索喧しい。汝に呉ると投つくる。イヤ金貰はふ好みがない。汝に呉ると投返し。投つけ打つけ摑みあひお花はは、つと泣出せ。太郎左衛門つゝ立。コレ半七お花はこちの奉公人。親仁とのせりふなら何所ぞ外で仕たが能い。門には大勢人だのり客の邪魔して貰ふまい。それ男共追出せ心得太兵衛長兵衛五介。ばら〳〵と立のゝり。無理無体に引出す。お花はわけも正躰も涙ながらに取付と。どこへ〳〵と押分る。親仁と中の關守の雪駄片足になら草履。足にはたらぬ半七が髪と摑んで引立しは。目もあてられぬ次第なり。サテ親仁も先歸つて諸事談合は明日の事ヘッテ それもそふ然らば明日參りませふ。申までは及ばぬが。花めと敷居より外へ手放して下さるな。ヤイそこな不孝者。汝明日來てなんとする待ておれ。ヱ、息せい張て喉が渴くと。ぐぶり〳〵と熱ばなの。茶びん天窓と振立て。河原と西へと歸りける。斯る哀の最中二階の階子ぐはた〳〵〳〵。敷のら坊主の佛頂顔。お花そこに何して居る。先の押への盃はいつの世に戻る事。惣体今夜は和女が顔浮々せいで酒が呑ぬ。氣と替て西石懸の關東屋で騷がふ。太郎山衆貸してたも。ヘテ殘りの子供は西石懸が天竺へも。御同道お花一人は我等が内。手放しては内證に氣遣ありまの。いふな〳〵。皆迄云ふな湯のだんこの。湯治するなら遣ひ錢見事な事かと金三兩。衣の下より投出せば。是こそほんの添け有馬の湯のだんこやれものだんこものだんこ。金はありまのゆのだんこしよんがる。西石懸へと騷ぎける。同じ所も西側は。祇園丸山前にうけ。芝居の櫓暗き夜も。行のふ人の灯燈は月もおろかと

照渡り。見おろす〳〵。おろす窈窕のらぬつと出た。ほうらく頭巾の醫者殿は。藥師如來の引合つぼ屋の客と脉とる。それ〳〵〳〵花車も亭主も槌で庭掃く人よびに。走る足元おのるじやないかれ玉じやないの。お玉やあい。はて是から呼で屆くものの。わけもないと云はん紋紗の衣着て。ぞめき姿ののら坊主。後姿見た樣な。ヲ、それよあれは愚僧が五人組。万年寺の同宿忍び戀路の摑みどり。深緣屋の小丁稚が。一中節の川風に聲も廣がる扇屋の。仲居のまんが供して通るあれは澤村長十郎。あつたら男と頓て大坂へ下り舟。歌流金子も難波津へ。咲くや此花其花の。噂も戀の種ぞかし。苦のない女郎の仇口と聞くにも増る涙の露。お花は一切氣も浮ず四條の河原幾萬人。ぞめきの中に彼の人が若やと目とも花色の。張樊頭巾しよんぼりと番屋の蔭に佇立しは。偖にそふじやヲ、ちよつと逢たい。云ひたいとも山衆の手前。客の手前も量りのぬ。床柱に打凭れ念佛申して紛らこのす。料理人の傳介盃と下に置き。ヤヲ花樣の念佛で思ひ出した事がある。三味線小歌も古めのし。町方に流行る阿彌陀の光と云ふとして。御一座の花姿樣方誰樣にても阿彌陀如來に當つた者が豆腐と酒と買に行く役人。色里に無いづな騷ぎ。花姿樣方いのにと云へば。ヲ、是は珍しい

3371 14

早ふ〳〵と紙押廣げ。蜘のす御光延紙引さいて錢の高。もみ闘は惠方果報後に無理云ふまいぞ。ヤヲ今が大事の所と鼠なさしてしめわけに。さよ樣ぞふじや。十六文。お仕合〳〵。藤さまは。三十六文。小めろの林は。十文。夫はは、なみさゞ波や。しが樣たつた二文のお杉はなんぼ悲しや巳は三百じや。ヱ、儘よ前垂質に置ふ迄。ヲ、云やる迄ない錢がなくば布子と。はぎさん島さん是も如來ははづれた。ヤヲ是のらは花樣さり〳〵もみ闘明さんせ。ヲ、忙しい何ぞいの。私が樣な因果人がなんの阿彌陀になるものか。これ見さんせと押披けばそりやこそ云はぬのヤヲ花樣が阿彌陀じや。名代は叶ひませぬ花姿樣に豆腐買して。居ながら田樂喰ませふ。さつう坐數が晒落て來たヤヲ面白いと笑ふにぞ。お花は何がなのこつけに出たいは心一杯。猶も色目と曉られとヲ、迷惑。そんな事に今まで歩いた事なけれども。てんぽののは往て除ふ。其間に用意してとのんせ。ヲ、用意櫺子鉢刷題櫺子木しやに搆へ。待て居ます早ふ〳〵。ハテそこらは合點じやと姿も下女に。二世のけし男の爲や徒歩跣足ついに被なれぬとき手拭急げばまはる。小褄はら〳〵杉が前垂のう橋と。足もしどろに行過る。半七は番屋の影ちらと見るより。コレく爰に居ると招のれ。ヤヲ半さんのいの。逢たのつ

たと抱きあひ兎角は涙ばかりなり。コレ泣て居ては濟ぬと。今宵中に大坂迄退ねばならぬ。ヤアおじやと手とひけば。ヤア待んせ先刻の小判ぞふしての才覺ぞ。詮方なさに恐い事なぞさんせぬの。有樣云ふて落付せて下んせ。云ふ迄もないと此身になつた半七と粉に叩いても一歩一ッ誰が貸う。先度の脇指三十二兩に賣拂ひ。銘なしの下坂すも燒も替らぬと。八兩で買ひ替へ貳兩で銘と彫せ。拵へ濟して大坂へ下し。其賣へぎの廿兩たとへ首になるとても。もふ取返しのならぬと。此上ながらも罪に遇ば我一人。伯母媚伯母にも難儀とのけずで我身が恐しいと。語ればお花も身と振はし。ヤアそんな事であらふと推量に違はぬ。いとしや私も〻へ種々にお身と狂はそる。詮議の時は皆私が業にして身と逃れて下さんせ。ハヤ罪に遭ふとも逃るゝとも。分隔はないはいの。はんにそふじや女夫じやものと又締寄せて泣く中に。跡の二階に花樣遲いこりや豆腐に買れてこの。迎ひに往けと聲々の南無三寶。見付られては足元暗き。いせきの石に踏くぢき。長き緋絹裏足纏ひ走るとすれど夜中の太皷。どん〳〵ぐりのづしと出れば建仁寺。だらりが鳴ぞだらつくまいぞ。駕籠よ〳〵と呼れども無の聞ぬこの耳塚の。西に錢座の名のみにて。小錢なければ草鞋も。二足と小判一兩で買ふて穿身ぞ哀なり。

お花半七道行

いくよ〳〵の憂勤。七枚起請そら擬文。日本國の神さんと欺した罪か欺された。人の恨のねたみぐさ。ついに我身の下り舟。乘とくれたる淀堤。淀の河水行く末は。いのなる罪に大坂の。道がどこやら何里やら。身は初雁よ初霜に。寢亂れ姿忍ばしと。前垂とつて丸絆の襷とじみな抱帶。しやんと結んで引締て。歩むとすれど行き馴れぬ。道はかぐらぬ女旅これも何もへ男山。作りし罪は山崎の。麓はあれよあはれげに。いつの都へ歸る山。春は梢にいろ〳〵の。花咲く山にと山巡り。となりは青し夏山の。のしは散るてふ卯の花や。山時鳥山おひの。景色の花に顔つくる。笠と傾むけ山めぐり。秋はさやけき月影の。いたらぬ山は無れども。わけて名高き山うけの。月見る方へと山めぐり。扨又冬は遠山の。雪もてくる雲のあし。賢き雁は南向。北と後に山のこそ。山又山や峰白し。雪と誘ふて山めぐり。巡り〳〵て山姫の。山衆交りの淨瑠璃も。夕べ限りの口癖や。今日は姿と町風に。

扨もとそれぞ隠れなき。帶のひらこの近くなる。松原過て河邊と見れば。あれ〳〵五ッばかりの子と眞中に。乘合舟の女夫づれ。思ひなき身の高笑ひ。余所のつまごと浦山し。流れわたりの情であろと。網の目にさへ戀風が溜る。おぎの〳〵上風身に染々と。切て一夜は虚なしに。ほんの女夫といつの世に。いはれつ云はん情なやと。抱き締たるそぎ袖も涙にひたす斗りなり。間夫で逢ふたも一昔。それ覺へてこの一昨年の十七日のおぼろ月。宵のゞさけにはの〳〵と。二人火燵のじやらくらと。憎や烏に起されて。あかぬ別れの朝より。日文ちぶみの付屆け。いよしごげんと書たるは。ほだしの種の花すゝき。ほんに誓文いとしさに。幾夜の夢と結びぶみ。方樣まいる花よりと。思ひまいらせ候べくの。わけの酒盃色見へて。わきていづみの思はくは只逢まして〳〵。又の御見とまづのしく。その言の葉も昨日といひ。今日と暮して飛鳥川。流れの里はは〳〵と。跡にながらの夕あらし。髮のゞくれのはら〳〵。共に亂るゝ我心。曇ある身は恐ろしの。お城も近き難波江のよしあし知つてはまる身と。異見は釋迦に京橋の。此方の森と隱家と。暫く勞と晴しける

下の巻

急ぐとすれど秋の日の。短のきあしの難波潟。京橋より暮のゝり問ど隱れも長町の。伯母の家作常々の咄に大方顯當て。伽羅細工の甚五郎樣は此方のと。窯明れば、いのにも是が甚五郎。何方からぞと云ふ伯母の聲。イヤ京の半七下りましたと。お花諸共つゝと入り。ヤア是は〳〵珍しい。文の來たは一昨日間もなふ何の用あつて。ヤ連も有るそふな誰樣じや是へとあいしらふ。伯母樣お久しうござんす。いつぞやお目にかゝつた花と申す者。御無事で目出度御座んすと。腰打のくる二人の体心得がたくや思ひけん。ハテよふこそと斗りにて。不思議そうにぞ見へにける。半七色と曉られじと。お花ことも奉公の年明。和泉の親元へ歸る道幸ひ同道致しました。イヤ先それはそふ誂への脇指。先樣は侍衆お氣に入たのいらぬか。萬一お氣にいらいで甚五郎殿や伯母樣に。難儀のかゝる事あらば。其難と私が身に受ふと存じ參つた。其次第が氣遣なぞふで御座ると言ひければ。ヽ爰な人つがもない。細工がお氣に入ぬとて。何の此方や其方に難儀がかゝる物ぞいの。其上悦びや一昨日下ると其儘。お屋敷へ持參めされしに。柄まはり緣頭鞘の塗。萬事殊の外御意に入。甚五郎が女房はよい甥と持た仕合者。後々はお屋敷の御用も仰付られ。出入させとの御念比いよ〳〵細

工に精出しやと。聞くより二人は手と合せ。ェ、有難い忝けない。天道のお助け命拾ふたお花悦びや。嬉しうござる胸の痞がずつと下つた。ァ、道理〳〵。武士と相手の商賣大事に思ふその冥加。今日又俄にお屋敷のら脇指について。何やら急なる御用とて甚五郎殿と召に來て。晝過のら參られ今にといて歸られぬ。定めてお悦びに又渡しの御祝儀。お振舞が有るそふな定めし醉て戻られふと。云へば半七色違へ。ム、脇指について急用とて又呼に來ましたの。サテお花京のら道中云ふ通り。こふ有らふと思ひしと我は是に待うけ。甚五郎殿に對面し脇指の御祝儀身に引受て祝ひ。運に依て今夜中にお屋敷へ。召出されふも知れぬこと和女は此邊旅籠屋に一宿し。明日はそう〳〵親元へと云ふ聲付も悄々と。そふしては半七が一分は立ねども。ァ、なんとせふ暇乞じやと。胸に手と組み俯向て涙と隱す斗りなり。お花も涙に聲慄ひ。聞へぬ事云ふてくだんする。悦びも悲みも二人が身に引受る約束じやないのいの。甚五郎樣に逢まして有無の事と聞く迄は。私や爰と動このぬ。伯母樣も女子じやが男の一世の大事の時。見捨られふのコレ半七樣。むごいと云ふお人やと恨み詫ちて泣きければ。二人の顏とつく〳〵見て。其方衆が云ふ事は何の事やら此伯母は。すつきりと合點がいのぬ。此方の連合甚五郎殿は武士附合して堅い人。半七も侍筋行儀强い若い者と。常々自慢し置しに夫にお山と同道し。初めて對面させられふの。一町北はみな宿屋二人ながら早ふ往て。甚五郎殿に逢たくば半七ばのり明日とじや。夫婦にも成果せ首尾よい後はお花とも對面さしよ。今にも歸られ此体見せ。大事の甥と連合に見限らするが口惜い。此世話やむも大切さ。はや〳〵と氣とせけば。憐みの忝けなさ涙が溢れ有難し。然らば伯母ゆへ一寸内證申と事ありと。にじり寄れば。ァ待や。歸られふのと思ひあぶ〳〵すると。庭におりて耳門の鎖としやんとのけ。サァ何事ぞ氣遣し語りや聞ふと云ふ所へ。甚五郎遽だしく門叩いて。今日が暮て門鎖る明よ〳〵と云ふ聲に。そりや情なや歸られた如何せん。借屋の路次へも迴されず押入には夜着布團。何所へ隱さんのやはかくるゝ。帷子入れて夏過し明長持に秋の鹿。つまも憧れて諸共に押隱すてそ哀なれ。蓋と押へて聲立てまいと欠伸ながら。ァ、どろ〳〵と假寢の。寢耳にけはしい叩きやうと。耳門明れば甚五郎せきにせいたる顏色。血眼になつて駈上り。ャィ女房共。甥のとのに掛つて此甚五郎が身代破滅。命の大事になつてきた。此脇指折紙付正銘の信國と。今の世の廢物下坂にそりのへ。銘と似

せて突つけた。先は武家方出入の門。盗人は女房の甥此甚五郎が存せぬと云ふ言分ならず。京へ詮議に登つては欠落者と町内へ。付屆にあふては人中で口利れず。死ぬるより外文珠の智惠にも能はぬと。脇指のちりと投出し溜息ついだる斗りなり。伯母ははつと胸塞り。扨は半七が身に覺ある詞のはし。思ひ當つて途方にくれ暫し返答もせざりしが。半七元より覺悟の前長持の蓋押わけ出んとすると。睨みつけ〳〵。脇指取あげなふ甚五郎殿。私は女子の物の道理は知らねども。ついて廻る身の因果は。大名高家智者學者も免れず。是は正しく半七めが業なれども。半七がして半七はせぬ心。何と隱さん元彼の信國は。常々語りし我家に三代迄は祟ると云ふ。性にふさはぬ脇指。一目で是はと思ひしが。武士の上こそ刄物の相性町人職人に成果て。何の咎の有るべき親もない一人の甥。是とつでに一國のお細工の得意つけたさに。私がさもしい心のら律義またい半七に。惡根性が付そめ身の大事仕出したも。往廻つて三代目の手に艤しその祟。知つて居ながら此伯母がとしと仕たる其咎め。因果とはのは思はれぬ。耻のしやでざる甚五郎殿。男と養ふ女子も有る。廿年足ず連添て何と男の爲もせず。身の難儀とのけると恨にあらふ憎のらふ。それが悲しい面目ない。許して下され甚五郎殿と。夫の膝にどうど伏し聲も惜まず歎きしは理り過て哀なり。甚五郎も男氣の夫婦の中に何の面目。女房の甥の仕業存せぬと云ふて此甚五郎が立ものの。見ず知ずにも義理に依て命と捨るは男の役。氣遣するな首切れふが。籠へいらふが皆我科に引うけ。半七に憂目は見せぬと心は利發に逸れども。差當つて相手づく思案にくれてゞ見へにける。女房は手と合せ、情の末とて添けない。侍衆は斯樣の事と皆御存じ。脇指の因緣と申し伯母一人の科に落し。こなたにも半七めも罪と脫れて下されと。脇指取てするりと拔き。本のは信國是は下坂。作は替れど燒刄寸尺一對なれば。一家に祟るは同じと是故に父樣が。人と打て其刀でまつ此樣に押肌脫ぎ。逆手にとつて左の脇ぐつと立てと云ふ詞。直に突たて右へさつと引廻す。是はいのにと甚五郎縋付ば半七夫婦飛で出。伯母樣狂氣か情ない。身に覺ある故に死に來た半七と。脇指に取付と突除て。ナヽたわけ者汝と殺と程ならば。なんの伯母が長口上自害ともする物の。手の惡い事仕たれども欠落して身も隱さず。伯母婿の難儀と思ひ身と捨て來た心。さすが筋目程あつて。切ても是はでのしたな。汝が父御は我兄樣。最期の時に預りし甥なれど。着替一ッ帶一筋何と優しき事も

なく。預りし甲斐もなのりしに。大事に替る命其方には遣ぬ。皆兄様への奉公ぞや。伯母さへ死ぬれば科は一人に極つて。脇指は上り物外に御詮議は殘るまい。刃物の祟も三代濟む。行末目出度ふ出世して親祖父の名字と繼や。サテ早ふ往や〳〵と。深手に息もされ〳〵の血汐に落る涙の体。花はわつと咽返り半七は猶涙にくれ。伯母伯父は親同前張付にこゝるとて。一寸も退ませぬと取つけば甚五郎。ヱ、不合點な。其方が爰に狼狽て伯母に犬死さするのと。二人と取て突出し鉤鉄樞しつとゝおろせば。なふそんなら退ませふま一度逢せて下されと。夫婦は門に打凭れ聲と揚てぞ泣き居たる。伯母は苦む息づかひ。ナフ甚五郎殿人立のない前に早ふ死にたい止目は。どこじや〳〵と悶もれば。涙ながら甚五郎。女なれども武士の切腹止目とは勿体なし。介錯せんと立寄れば。いや〳〵人の切たと我切たは。疵改めに顯れて此方の言分むつかしい。急所と教へて下されと男增りの自害の体。夫はいよ〳〵心くれ。爰と〳〵と我喉笛へ。指せば頷き振上る。手も弱りはつたと落て。太股に突立る又振上れば突外し。肩先がばと突込たり。左手へはづれ右手へはづれ苦しむ顔色。夫は悲しむ南無阿彌陀。南無阿彌陀佛の聲と力に喉のくさりと一刀。うんと斗り目もくれなゐの海もみぢ。夜明の嵐に散失せし墓なさ最期ぞ是非なけれ。歎きの聲は何事ぞと向ひ隣裏借屋。潜戸蹴放し駈入てやれ女の腹切自害よと。組中年寄月行事。町代夜番が棒ちぎり木。ばつたくさばにとく霜の。墓なさ命南無阿彌陀南無阿彌陀佛疑ひなき。西方極樂淨瑠璃に語りて哀と留めける。

長町女腹切終

淀鯉出世瀧徳

近松門左衛門作

元禄十三年四月八日初興行、作者四十八歳

曲輪住居は時雨の雨よ。ふつゝふられつ。むら〳〵さめの。まだひぬ露もまだひぬやよや。ナゝさりはふだんの伽羅とたき。畳にもまさる燈火は。月常住の夜見世のや。朱雀さんやもいのなと。直下にみつの浪花の里。戀も所の氣につれて万手廣き大曲輪。色に擲つ金銀は。土の砂場の西口や思ひはころぶ袖口と。九軒阿波座の野良烏。月夜はなどか闇の夜も。瓢單町と腰付に異見ふる手の印籠の。底に焚がら吸がらの煙に油煙たな引て。霞が關の東口。爰ぞ浮世のだての大木戸。あけぬは銀のとがしの關。夫つら〳〵おもんみれば大盡客衆の秋の月は。小判の雲に光り。小傳よびましや長へんじ。驚のすべき夜はもなし。三番太鼓つてんてん。天下は夜なの八ッ過。曲輪は戀の畳中や駕籠やろ斗りぞ寢聲なり。頃しも初冬。亥猪餅小豆織のべんがら縞。羽織の上に手拭おび。頭巾鼻まで顔隠し。女郎買ふべき風にもあらず。さながら用なき体にもあらず。どちらへ何とも片づけて思案に落ぬ風俗。新町橋の橋の上橋辨慶が薙刀の。鞘拾ふたる如くにてうろ〳〵として立たりしが。ち

淀鯉出世瀧徳

近松門左衛門作

元禄十三年四月八日初興行、作者四十八歳

曲輪住居は時雨の雨よ、ふつ〳〵ふられつ。むら〳〵さめの。まだひぬ露もまだひぬやよや。ナ、きりはふだんの伽羅とたき。畳にもまさる燈火は。月常住の夜見世のや。朱雀さんやもいのなと。直下にみつの浪花の里。戀も所の氣につれて万手廣き大曲輪。色に擲つ金銀は。土の砂場の西口や思ひはころぶ袖口と。丸軒阿波座の野良烏。月夜はなとか闇の夜も。瓢單町と腰付に異見ふる手の印籠の。底に焚がら吸がらの煙に油煙たな引て。霞が關の東口。爰ぞ浮世のだての大木戸。あけぬは銀のとがしの關。夫つら〳〵おもんみれば大盡客衆の秋の月は。小判の雲に光り。小傳よびましや長へんじ。驚のすべき夜はもなし。三番太鼓つてんてん。天下は夜なの八ッ過。曲輪は戀の畳中や鶯籠やろ斗りぞ寢聲なり。頃しも初冬。亥猪餅小豆織のべんがら縞。羽織の上に手拭かぶ。頭巾鼻まで顔隠し。女郎買ふべき風にもあらず。さながら用なき体にもあらず。どちらへ何とも片づけて思案に落ぬ風俗。新町橋の橋の上橋辨慶が薙刀の。鞘拾ふたる如くにてうろ〳〵として立たりしが。ち

よこ〳〵と立寄て。是駕籠の衆卒爾ながら物問ひませふ。今宵九軒の井筒屋の客は。何處衆の何とした人。まだ爰に遊んでのぞふでござると尋ねける。ァ、されば井筒屋のお客は。隱れもない八幡の住人江戸屋の勝二郎殿。替名は鯉様拾萬兩遣ふても。こちとが百錢落いたとも思はぬ程の身代なれども。新七とやらいふ手代堅むくろにせいたうし。一門衆町所迄頼んで。土藏〳〵に封とつけ一分の金も遣はせなんだげなと。惣兵衛といふ相手代若い旦那の氣と誥させ。頻はせてはならぬと新七と追出し。氣儘にぐはんぐはと遣はせる。鯉が生洲と飛で出て日比馴染の茨木屋の。吾妻ととんと請出し。明日は直に八幡へ。今宵曲輪の名殘じやと非筒屋で大振舞。何じやは知らず井筒屋の。庭のら門まで長持で通られぬ。今夜の物入ざつと積つて二百兩。扨も金は片いきな有る所には有るものか。私等は夜畫あがいて三百は儲けのねるに。能ふ飲だとて一歩取り。よふ笑ふたとて二歩取り。兩肌脱でこそぐられ鼻の穴へ胡椒入れて。くしやみしても一角。いのな鯉でも鮒でも一くらあのふと語りける。新七扨はと恨しく。腹の立つにも主思ひ。ム、夫は聞及ふた富限者ずんぐ若い人じやげな。仰山な酒呑と聞たが。今夜も酒であらふの。ァ、〳〵ならびもない呑抜。親茂庵といふたも命と酒に替られた。鯉殿の母御せも元爰に勤めた人。どちらへ似ても蛇の子孫。夫でもよい衆のしるしには萬事に達した器用人。能の脇師と手いけにして九軒で主の座敷能。常住酒で足ひよろつき三番叟も高砂も。皆猩々の亂れのと思ひ升とぞ笑ひける。女房お半も手分として。見遁そまいの目もさよろ〳〵。鮎堀邊吟行來て。夫と小影へ咳逆ば爰へはまだ見へぬのと呼けば。ム、よい〳〵樣子は知れたぞ。まだ井筒屋に居らるゝげな。程は有るまいぬのりやんな人が見れば不審が立つと。一ッ所に立もせず橋と越たり渡つたり。忍び竒む女夫の姿夜見世戻りが氣と付て。ァ、こつてりと味な事。妓狂ひよりあの方の實入が能ろふといふも有り。時分がら心中の下地の又義太夫が口の端に。新町橋とのさゝぎの橋と語りて行く人も絶て其夜も更にけり。なふあれと見や中のら灯提引舟交くら、禿が謠ふて客送るそりや是に極つた。和女は駕籠に取つきや。こつちへ任せて置しやんせと大門際に待のくれば。遣手のつなじや羅生門あけてたもと云ふ。茨木屋の大蠢鯉にはあらで雑魚場の人。そゞ木樣明日駕籠の衆頼む。合點と北へ走れば新七夫婦。なむ三枚肩見送

りて。口と明てぞ惘れたり。それ〳〵そこへ又提灯。今度はよもやはまるまいと。窃くゞると手ぐすね引。女房しかと引捉へ見れば色は眞黑に。横肥つたる菊石頬。道頓堀のさぞ島傳八はつとしらけて立退ば。傳八も膽潰し是は君何し給ふ。人違へとは存ずれども色に袖と引れて。神ぞ忝なふ思はもるゝ〳〵。しづも昔は戀と磨き年中曲輪に入ひたり。太夫天神に引づり引張れ。夫で顔が引つゝた西瓜の様な顔なれど色は黑實。すんぜ風味のよい男。神ぞ一切振舞たい。ホゝく笑ひて南へ歸りけり暫く有つて。井筒屋の能が濟だと出入の者。兵法遣ひ座頭茶の湯者古道具屋。大酒食悦お影と蒙る八十末社、流石の曲輪駕籠されて石駄片足の酔潰れ。遙のの跡よりのさ〳〵と彼奴は手代の惣兵衛め。同道は侠人組能の師匠の富川め。京の浪人軍四郎。腎者はそれぞる本道守らぬ目藥師なんど。中にも惣兵衛かさとつて。なんと何れも旦那のはゞと御覽じたゞ。われみな我等がさとる事。兎角此惣兵衛と肌と合せ。羽翼に付て廻ちつしやれ。一期の身代固めて遣ふ。はて旦那の身上で一年に。千兩貳千兩はつゝれでも有と。旦那と名代に立てはぞふ包めふとも自由なと。この新七のいさずりめお爲顔で旦那とひづめ。家久しい我等と押退け。一人威勢と振はふと

仕居たと。旦那へ吹こみまくし出してのけたが。聞けば大坂に狼狽て。此惣兵衛と公事のみやのと吐すげな。あはれでんぞへ出やれゐし。五幾内とせいて見しよ。今の間にでささげて心のちの非人仇討。ぞこぞそこらの橋の下新七は居やちぬゐと。口合惡口潜上はりぞつと笑ふて通りけり。新七ぞふも堪へられず胸と按り靜めて見ても。律義一偏ゐ眞直に一筋な若い者。末の事も思はれず切てくれふと飛で出る。女房抱つき是こゝな人。女夫の者が世話やくは勝二郎様へ御意見申ば爲ではないの。あいつ一人切たとてお主の爲には何がなる。新七が言分なく身のあつさに切たと皆手前のふみかぶり。無念と堪へてお爲になり親旦那様の御恩と。とくる心はないのいの其様に短氣では。私や心元ないと耻め止れば。新七夫も皆合點理が非になるとは知たれども。今の惡口聞ぬの。彼奴が此前親旦那の惡性金と。十四貫目横取して曲事に遭ふ筈と。兎や角己が精力で沙汰なしに事濟んだ。其時には命の親と手と合せて拜んだ。夫ゐら十年たゝぬ間に少しも爲になりそふな古い手代と嫉み出し。恐くすゞしい此新七に無い難つけて暇出させ。旦那の身代空にして今の様な雜言伸上つた頬見れば火に入る事も思はれぬと。涙と流すぞ道理なる。時に揚屋の上する女子

下男。門番起ひて少門と頼みます。是は此方の大事のれ客。浮世小路迄お歸りじや。きつう醉て御座んすもへ。斷り云ふて内からお駕籠にめさせます。氣と通して下んせと云ふより早く門番。皆迄云ふな合點じやと。簾開いて目と眠るも日頃の金の威光ぞかし。夫婦すはやと橋詰にて。駕籠の後前しつかと捉へ。お駕籠待て下されと引留れば駕籠の者。サテこりや狼籍して。息杖の胸打とくらふかと振上る。狼籍は致さぬぞ旦那のお爲に致す事。擲ば擲て殿のば殿け旦那へ一言申さぬ中は。駕籠とやらぬいや放せ。いや遣ぬと捻合ふ勢ひ駕籠と横に打明けて鼎ながらの勝二郎。橋板ところ〳〵〳〵川へ落んとする所と。お半ちやつと引起し後と抱へて膝の上。一昨日のうちの醉醒ず女郎の小袖と打かけながら。舌も廻らぬ夢半分。太夫爰まで送つての。ェ、かたじけなんさんの八幡酒には醉はぬ。今のは兼平の能の手。木曾殿が泥田へ踏込れた所。末しら雪の薄氷。深田に馬と駈落し。引ども揚らず打てども行ぬ望月の。駒の頭も見へばこそこは何となら人身の果。いやはあなんと面白い事のとひよろ〳〵正体無りけり。申し旦那樣是はどふしたお身持ぞ。お前のお影で榮耀する今夜の人も大勢あるに。お駕籠に一人附く者ない。是が江戸屋の勝二郎樣のお行儀とは言はれまい。私が男の新七にお暇と下され。お出入さへ止められたれども。眞實お爲になる者はお家で新七ばつかり。御身上のがいとなと惣兵衛めと新七と。思ひ替て下さんすはお馴染とも思はれぬ。其上忘れはなされまい。前方私御奉公致した中。お寢間へ來いのお傍に寢よのと人頼み迄あそばした。私は一ッも年重なり若いお主と唆のす。熊手よ慾よと言はるゝも口惜し。奥樣お呼なさるゝ時のもじやくじやも如何と。お暇と乞ましたれば心ざしと感じた。さりとは女子に氣特者。あの新七といふ者は翠茂庵不便とのけ我子の如くせられて。兄同然の新七と夫婦にして一生見捨ぬお約束。其新七と追出し仇の樣になさるゝは。其時から私と憎さに夫婦にあそばしたの。憎まるゝ覺はなけれども。お心に從はぬ恨と杵であたり杓子であたる御仕方ぞ。但は今にお心殘り悋氣故の憎しみか。夫なれば猶汚い氣。何が惡ふて新七が御意見は御意にいらぬぞ。頼もしうないお主樣やと。涙と溢さぬばかりなり。實に酒の醉本性忘れずお半と突退け。因緣咄とさとらふ。新七めが意見聞きたふない。己が親父はな一年に八千兩九千兩宛。三十年遣はれたれども遂に浮名は立なんだ。こちが身代で五百兩や千兩遣ふたら何じや。慮外ながら夫と新七めが。遣ひ潰と

の身持が悪いのと。一門一家町年寄庄屋迄觸歩いて。藏々に封と附けさせて阿呆者にしてくれた。忝ないとの何じや和女に心が殘つて悋氣じやわ。とけよ尤も初は惚て居た。けれども今新七めが喰汚して。裏までのやして喰さがひた物と。此方所望にでもあらぬ。て、慮外ながら新七めが口故に。揚屋の厨けも無沙汰になり。若い者の一分と捨ふとした此恨は盡せぬ。勘當の上の勘當じや。サア駕籠やれと乘んとすると新七飛出逃り付。お情ない旦那殿何とて左樣に邪にお聞さなさるゝぞ。新七が御一分と捨たとは恨しい。捨まい爲の御意見金の事は申さぬ。千兩が萬兩でも金程づくの。お身につくお慰みが有るにこそ。惣兵衛めが計ひにてもがり共と太鼓につけ。十兩の物入と百兩に附たて。九十兩は分取にして阿房にして笑ひまするが。こなたは御存知でざらぬか。吾妻殿の身請の金も。私お家にある時分七百兩と申も金惣兵衛に渡した。其上に此度名物のお家の道具。京三界質に置き。二千兩余の御借金が出來たげな。旦那には借金させ手代の惣兵衛屋敷と求め。お出入の醫者浪人田地買ふたり銀のして。富限になるが御存じないな。御念比の醫者はあれど善惡とかぐ鼻がきかぬ鼻缺醫者が。入殘しの目藥でもお目が明ぬか情なや。此新七めが親は大和の貧乏人。幼少の時藤田小平次と申した。狂言役者へ奉公やら養子やらに參つて。女形と致したと親旦那のお影で。お家へ參り手代並になされしが。さすが育ちが耻しい算用算勘存せねば。何と奉公御恩と送らふ樣はない。律義と我身の奉公にしてお爲にならふと存ずる一念。五臟六腑に染込でお主と大事に存じまする。茂庵樣の御臨終勝が事と頼むぞ。お氣遣なされなと請合た甲斐もなく。斯樣にお身と持くづさせ。佛へ言分何とせふ。お墓所へ參つても顏ふりて戒名と。祿に拜みも致されず涙に沈み居まするわいの。夫さへあるに此盆のら。お前のらの言付の惣兵衛めが私の。若旦那の勘當の者お旦那の墓へは參らすなとお寺へ急度言付け。挿た花も取捨て手向の水迄打明けて。未來に在す旦那にさへ疎せふといふ事の。お爲と思ふ新七が左程お氣にいらぬは。水と火との合性か余りと云へば曲がないそふではない若旦那と。主の意見に恨なき詞と過し推參云ふ涙は主の藥ぞや。勝二郎大酒の上猶々氣にや鑛けんゃア意見云ふも所がある。途中に駕籠より引ずり下し。耻のゝせて意見せよと親者人の遺言の。サア此慮外の言分があるか聞ふと怒らるゝ。是申勝二郎樣密かに御意見申さふも。門爪も踏さしず。取次申す者はなし。よしお屋敷へ御公して六尺共が手に

の丶り。擲殺されふば殺されふ。主從の冥加は忘れないと。朔日廿八日には御門に禮して罷歸り。さもなき時にも月の中に二度三度臺所の口迄參り。傳人さへあらば內證から申上んと存ずれども。さりとは人はつれないかの古への傍輩も見ぬ顏し。目とかけて、引廻した丁稚小者飯焚迄。詞とのける奴等もなく馴染とて可愛や。白犬が見知て尾と振てしなだれる。犬に劣つた畜生共恨むまいとは存ずれ共。凡夫心の淺間しさ無念でならぬ女房共。エ、口惜い新七殿但我々僻言ならば。親且那の魂魄冥途のら蹴殺いて下されのしと。夫婦は橋に平伏て聲とばのりに歎きしは不便なりける心なり。醉醒の氣は上るぐつとせいて勝二郎ヲ、親父迄もないと身が蹴殺いて見せんずと。飛懸つて引伏せ。胴骨とさん〳〵に踏付る。女房是はお情なしと取つけば其儘とけ。手向ひそなお腹の愈る程踏せませ。サ、踏いでとこふの重て斯樣な慮外とせば。下々に擲殺さする用心せよ。駕籠持て來いと打乘るも腹立紛れ譯もなく。後向くやら前向くやら縱に乘るやら横堀と。急げ〳〵と走らせし若氣の程ぞ笑止なる。新七は齒噛となしェ、く口惜い無念な。あまさかさせの事にても主に踏れて恨はない。傍輩の言なし故踏れたと思へば。腸が燃へるると。橋板毆き欄干も握り挫ぐ斗りに

て。涙に眼も眩みしがよい合點ヒや思案有りと。駈出ると女房追つて。思案とはどふぞいの。短氣と出さずと待しやんせと。引留ればしやまだるい。最前に惣兵衛め斬損なふたも女房故。短氣も短慮もいるとの思案は此胸にある。サア其思案が聞きたいいや是斗りは儘にして。放せ〳〵。思案聞ねば放さぬ。くらはするが放さぬのと。男思ひの女房と主思ひの男と。誠余りて掴みあひ女夫爭ひ犬くはぬ。犬の悋氣に咸されて。辻の番太が夢くらふばくろふ町とぞ歸りける。請出すといふ其日より。衣裳とも皆町風に。縫はりの茨木屋より嫁入とて。婿は八幡の岩清水あびせませんと井筒屋の。亭主は送る傍輩の太夫天神餞別と。持せ遣手の杉重に樽の名酒ともり口や。さだの煮賣と見る事も曲輪で成ぬたのしめ野に。紅葉たけ〳〵なべが茶屋枚方樟葉是も又。吾妻請出を山崎見ゆるそつこで乘物たてにけり吾妻乘物の簾とあげ是太郎樣。最早八幡も近いげな。兼て鯉樣道迄迎ひに出やんと菅。そこと此方のら先越てによつと押かけてはどふでさんしよ。八幡太夫樣是はずんぜ晒落ませふ。そんなら頓と菅笠で供やら主やらごちや〳〵は面白のるる〳〵飛おりて。ア、氣が晴れたわつさりと嬉しやそばで山見たも。勤の皮切こちへた故。愛汐ふんだは身のやいと十四の

冬より今年迄。夫に染たる風俗はいのな家にも走り出て。お山見じと目とつける上のら下る魚荷の戻り。歩き〳〵の高咄し。扨々浮世は知れぬもの。江戸屋勝二郎と云ふては石火矢でも崩れまい。長者の家と云ふれ共感陽宮も亡び時。一時の間にいとしぼや彼も言はゞ金故。生中持ぬ我等しき寢覺が樂しやといふ跡のら。科は何じや知れぬが勝二郎は追放で。八幡はにへる巳や見て來た。百両や五十両は彼でも取て退ふの。何のいの編笠さへ被せぬもの。請出された吾妻とやらはどふなる事ぞ可惜物。やすふで此方へ貰ひたい。何の彼のとの惡い沙汰口々言ふて通りけり。吾妻ふつと耳に立て太郎様今のはどふぞいの。いやな沙汰でござんすと氣遣がれば供の下女駕籠の者まで色違へ。辨當もちもくひさげぢう喉に詰りし餡餅の樂に相違の顔付なり。井筒屋も氣にのゝれど。氣落させじとこれ〳〵粋の樣にもない。あれは人の法界悋氣太夫樣と見知て。氣遣のけて面白がる嫉で皆云ふと。ぎゑん直しに酒にせふ毛氈敷けと勇んで見ても。どこやら体が明樽の底の心は澄ざりけり。あれ〳〵彼處へ泣き〳〵走つて來る人は。勝二郎樣のお草履取佐五介ではないのいのと。言ふ所へ佐五介息もされ〴〵なふ太夫樣。ひよんな事が出來ました。私しやなんと致しませふと泣て詞も無りけり。扨こそ噂に違ひはないちやつと樣子と咄してたも。泣て居てすむ事の佶と性根と附やいのと。叱られて涙ととめ。事の起は皆惣兵衛め。旦那といとしい〳〵と吐いたは巳が慾。お金には御一門の封が付て自由にならず。結搆な茶入悪軸お家の寶黄金の鶏まで。京で質に置くとて。なんとやら申そ位高いお公家樣の姫君と。勝二郎が嫁に呼ぶ其物入との言立。その公家樣のお袖判と僞判し。金の取手はよみ人知らず大内方より御詮索。科人は惣兵衛一味のあひずり。十人あまり粟田口にて獄門にのゝる筈。手代の業とは言ひながら名指所は勝二郎。存せぬとは言分立ず金銀財寶山田島。京大坂方々の家屋敷迄取上られ。着の儘での御追放何所としやうぞにござらふぞ。腹の内のら今日迄荒い風にも當らぬお身。さぞや途方がわるまいと思へばいとしら存じまそと。語れば一度に手と拍て悶れ果たる其中に。吾妻一人の物思ひ。兎角私が不仕合と余のと言はず泣き居たり。井筒屋も溜息つき。お吳止とも氣の毒ともいふた斗りで爲ふ樣なし。太夫樣は先お歸りなされませ。殘金二百両八幡の馬おりに請取る筈。惣兵衛とつうくつ致し茨木屋とば私請合。手形の上で今日お供仕り。斯樣の御難儀出來の所うの〳〵八幡へ參つても。貳百両

の金子誰のら請取り申さんやら。お笑止ながら太夫様と茨木屋へ渡しませねば。我等が手形消へずせず世間にばつと知らぬ内。早ふお歸りなさるれば私が爲と申し。太夫様もお首尾よし。サテお歸りと言ひければ。吾妻わつと泣出し顏とも上ず居たりしが。ひげない言分して下んす歸れなら歸れで濟む。歸れば吾妻が首尾よいとは爾した吾妻じやないはいな。可愛ひ男の流浪したのと聞きながら。身の首尾と思ふ様な傾城じやと思ふて下んすは。曲がない情ない忘八の譯が立ぬとて。再度曲輪へ立歸り身の耻は扨といて。勝二郎様の耻辱は是が何と雪がれふ。こなさんの請合は私が命有る限り。みぢんも難儀はかけまそまい。新町ばかりが傾城町でもあらばこそ。京の島原奈良伏見茶屋風呂屋へも身を賣て。美事に譯は立ませふ。世に落やうが何様しやうが。勝二郎様の女房になる程の吾妻じや。じめんずくに頼むのらは。乗も是に偽りない再度新町の勤とのがれ。勝二郎様の一分立て下さんせ。是手と合せて頼みまする。ほんに〳〵此よな事降湧ふとは夢にも知らず。伊勢兩宮へ太々神樂。愛宕清水住吉様へ金燈籠。八幡様へ萬燈其外神々宮々へ。鳥居立ての何のとて金のいる事厭はずに。神佛への約束も今では違へる身と成果て。人間どしの遠契約は騙りの様にも思はんしよ。夫が悲しうございすと。歎き詫たる口説言眞實見へて哀れなり。揚屋もさぞが只者ならず。よい〳〵二言と御意なされな。義理詰になつてきた。茨木屋の手前は此太郎が請取た。手形一枚なされいでも今の涙と手形にして。お前と爰で手放しまそお身とどこぞへ片づけて二百兩お立てなされませ。契約お違へなされても此方のらは尋ねませぬ。勿論催促仕らぬ是から互の心底づくと。切放れたる詞の末。それは定の有難い。胸が些とはひらけたと伏拜みてぞ泣き居たる。時に向ふの堤の上大勢人の喚く音。追放人の作法とて八幡公文所の役人數多。手々に割竹大地を叩き。勝二郎と先にたて兩手と引はり。聲とのけて追拂ふは忌々しくも凄まじい。憂事知らぬ和子様の氣と奪はれ性根ととられ。起つ轉んづ足たゝず橋本の宿はづれ。三國境の板橋にこそ着けれ。荒けなき聲々にて。サテ此所より追放す。京大坂淀伏見境とそへて住居叶はず。背くに於ては見逢次第打捨何方へも失おれと口々罵り歸りしは。硫黄が島に捨られし俊寛僧都も斯くやらん。往來の人も目と明て泣ずに通る人もなし。役人歸れば駈付て是私じや吾妻じや。不慮な難儀が出來ました去ながら大事ない。命が寶袖乞非人の身となつても。二人一所に居る上は堪納で

はわるまいの。醫への出入も爰なお人の男氣故。御苦勞のけずに埒明く筈。樣子は靜に物語る哀しむともなんにもない。けくで浮世が面白いと笑ふて見せて力とつけ涙と隱せば顏とわげ。委しい樣子は聞ねども。太夫が殘金埒あくとは井筒屋殿の親切。生中禮は申さぬ、面目ない此勝二郎は下人の罰が當つた。大賢人の新七が意見と用ひず勘當し。身の仇となる惣兵衛めに誑され。新町橋で新七と足にのけて踏だる罰。忽ちあたつて此仕合。身の先行のする事は今生で思ひ切たぞ。先の事は知らねども先は此世の暇乞と思ふて損のいのぬ事。何れも去らばと立出る井筒屋袖と引とめて。何方へお出なさるゝにも當分の御入用。路銀の余り少分ながら御懷中と差出を。手とつき一寸戴いて。志は千萬兩金子は申受まい親祖父の貯へと冥加も知らず遣捨て。金の罰があたつて金銀に疎まれ。手ぶりになつたる我なれば。此度佶と身と懲し一錢得難しと云ふとと。我魂に思ひ知らせ貧苦の修行の稽古の爲。金銀とては貰ふまじ。去ながらはつとり煙草煙草入煙管の余計あるならば。一本所望申たし。ア、お安いと〳〵煙管のらうは細くとも。お心と太ふして心中などあそばすな。いやるがくどい不足なふて死ぬるこそ。ほんの誠の心中なれ。金に詰つて心中する勝二郎でない証據。藥も少々貰ひたい。實に是は御尤懷中至寶の一包。藥屋は命堅い石見の樣と祝ひけれは。遣手の杉が太夫樣へ花色繻子の前巾着。人參いれてお餞別仲居の初は延紙二折。ちよつと仮寢もあるものとあぢな所へ氣とつくる。駕籠の衆の仲間から。三尺手拭抱帶とて進上す。是はかの五尺いよ此手拭と歌に謠ひし手拭の。是れは又加賀菅笠締とあらくと召ませとよ。げにも誠の志さまが土產の菅笠と。踊に踊りし笠よなふ。それは吾妻の花嫁子。是は吾妻が身請の果腰とよぢらす供もなき。紋日の夜床引のへて。禿もつかぬ草蒲團。夜見世の太鼓音たへて山崎寺の鐘の聲。早こう〳〵と響けども我迎ひにはいつ來ふぞ。お二人まめで中よふて隨分無事で御座舟で。迎に參る男山八幡の弓の弦きれず。便と待つぞ待るゝぞ。さらば〳〵と泣く聲ばかり。耳に殘りて面影は雲に消へけり。

勝二郎　初もめん

春の夜の夢驚かすくだかけの。其しだりとのむすぼゝれ。とくる思ひはいつのはと。いはで心にのこち草。根引にせんと言替す。身は捨草の捨もせで。浮名は流れの淀河や。何とたよりに水鳥の。波にもらるゝ世の習ひ。疎さは人の情なり。廣き世界は廣けれど。京や

浪花の住居さへ。せき留られし水車。月の影さへくるくると。彼方此方に汲わけられて。行けば丹波路戻れば大和。行くも戻るも二人連。女夫鳥のとぼ〳〵と。昨日のねやの花紅葉今朝ふる霜に朽そめて。身とこがらしの森の下道。憂しは蹈むもあぢさなさ。馴れし故郷の草も木も。今の名殘とどゞめのね。まて〳〵と啼く吉原すゞめ。よしみ〳〵の言の葉に。誑され渡る狐河。空に暮せし年月の榮花は夢の盃の醉醒枕。それは若草身とうらみ草なんの和女に飽たではなし。飽も飽れもせぬ中の戀と命が寶寺。昔の里の寢寐には伽羅で暖む床の内。起別れもく曉の袖から袖に手といれて。出口の風も寒からず。今の憂身の旅寢には。じつと寄せたる肌と肌。吹わけて吹く山おろし。麓に立る女郎花りんきしんきと艶きて。くねる心の男山いとし男と古への。世に引返せ弓八幡。神に暇と伏拜み東と見れば名にも似ず月こそ出れ朝日山。山吹のせに影見へて。渡つた〳〵光る君の渡つた。夢の浮橋六十帖と渡り詰十帖と詠じた。一に一夜のお情の夕顔の若ばへ。二に香たきしめて浮舟にのげろふ。紅梅竹川橋姫よ手ならひ。我名床しさあづま屋でこれ樣の忍び寢。世も忍ぶ人目も忍ぶ道芝に。鶯籠のるそべも白妙の晒干すてふ槇の島。はんま千鳥も友と呼ぶ。我は伴なふ人とても。なき顔隱せ笠取山。隱すとすれど心なや宇治の河霧たへ〳〵にあらはれ渡る網代木の。河瀬の水に袖ひちて。互に影とみづ鏡。やつれさんしたやつれたぞ。離れ〳〵のあの雲見れば〳〵。明日の別れが思はるゝ。憂さ我が身はいろはの文字よ〳〵袖に涙のあひもせず。木の葉散りぬる木幡の里。徒歩で是ほど行くとも。はつめい月や一口堤づたひの長繩手。續く里々山々も。皆近付の山なれど今日の憂身は心から。さぞ見ぬ顔と袖覆ひ。袂と覆ひ。笠覆ひ空と覆へば冬の日の。最ど短このくはや暮て。夜は長池の水の泡。水の澱に我もとてよどみ息らひ明さるゝ。

下巻

奈良坂や木辻も戀の札所にて。女郎屋揚屋卅三間昔の京の八重櫻。九重薫るこむらさき小藤と爰の四天王。續く盛こそ無りけれ。哀や吾妻は義理合の金の契約もだされず。此里一番名の高き山城屋といふ繼へ。中年四年二百兩命からりに身と賣て。大坂の埒は明たれど又傾城とならざらし。立横沙汰と聞ふれて戀の大和の色好。吉野の花も振捨る三わの索麺喰付て。買ふ人余れど賣る日は足らず。中にも立田の藤と云ふしなだれ男纏ひ付。揚屋も

諸分吉田屋の。仁三郎と定宿にて二階と一間宛がはれ。命有たけ首尾有たけ。金有たけと勤むれば。四天王の名取とも。今の吾妻が下に見て獨武者とぞ流行ける。藤も在所に稀男吾妻に深く染附の。龍田や沖津白波の太皷も連れず今日も又。逗ひ木辻の吉田屋の。仁三内にのヤナ妓樣達歴々のお寄合。おてき樣の待合我等が座敷へも。少貸して下されのしと云へば薫小紫。珍らしい藤樣の外の女郎とのらんすの。男の心の一筋に他へふれぬは。傍のら見ても憎ふない物なれど。こなさんと吾妻樣とはあんまりで小腹が立つ。しんきのわく程浦山しい見ぬが増じや。戀のめん〳〵稼ぎしやとはら〳〵立てぞ入にける。仁三郎忙しげにしよこ〳〵と立出。ヤナ藤樣いつのら爰に沒鎮座。手でもお拍きなされいで。夢にもしらがの母者人藤樣のお出じや。吾妻樣の御氣色も今日はお快よさそふな。申し醫者の名も喜緣の物。始は西の京の道偏と申す醫者の藥で。どうへんに有た所と昨日のら。三條の元喜と申す醫者でめつきり元氣が見へました。御祈禱と本服院息才法印と頼みませふ。銚子〳〵と手と拍く。是は〳〵吾妻が氣色快いとは。あたしこで善事聞初た。去ながらあの病氣は。彼の江戸屋勝二郎が昔と忘れぬ物思ひ。根引に此方へ取たれば氣がのはつて達者になる。そこには氣遣ないと。是に付ても一刻も早ふ請出したい。四年の年と三年遣ひま一年の所と。元金の貳百兩で請出そふと云ふのらは。親方も不足ない所ヱ、親子の衆がぶせいな余所へ取られて此藤が一分立ず死なねばならず。今日は金と突つけて是非とも詫て貰ふ思案。耳と揃へて懐中した是袖口のら手と入れて。虚の誠の是見や。どれ〳〵。ホヤく〳〵可愛らしい小判女郎。是はきつい詮索扨油斷とお恨みなさるれど。前髪もある私が親程な山城屋。算用だても申にくし母妙慶と遣まして。割つ碎いつ言はせてさらりつと埒と明け。只今お知らせ申さんと硯引よせ墨とすり。鹿の卷筆妻戀鹿鹿は春日の藤樣め。果報者め金持めあやかり者めと騒ぎける。それは大慶先吾妻に逢たい呼でたも何所にぞ。いつもの二階に御坐りますこれ林之介。吾妻樣呼ましや。吾妻樣太夫樣。林之介と呼つても返事もせず是はどふじや又例の勝二郎といふ淀鯉と。思ひ出して泣いてのな。鯉が付て居るそふな鯉なら煎餅まいて見よ。いや手拍子と抓て見よ。心得たん〳〵たん〳〵たんと手と拍ば。心浮ねど身の勤悲しい顔と見せまいと。わざとにて〳〵わさ〳〵と二階の口に立つと見て。そりやこそ鯉が現はれた盃とさしみにせふ。爰へちよくと御いり酒甘いとじやと喚きける

吾妻二階に腰かけて。是仁三様。たんと口があがつたの。あんまり鯉々言はんすな。鯉も瀧へ登つめ今ではどふも下はがない。物じて鯉と云はんとは勝二郎様故のいな。彼様は八幡の人八幡に鯉は有るまいが。合點がいのぬと云ひければ。それならば今日よりごんぼ様と申そふの。妓様にごんぼはいのゞさア夫も大事の。がゞのごんぼと云ふと有りそんならいつそう毛ごんぼ様。追付旦那の引抜ごんぼ目出度いごんぼと座とりもてば。ヱ、憎い口や敲ごんぼに仕たいぞと。二階降るも勇まねど。表面ばかりの笑ひ顔。いふて泣くより猶憂し。藤も彌々機嫌よく今日は嬉しい事揃。第一和女の氣色もよし。仁三親子の働きで身請の埒が明たぞ。懐中した金子と里に殘いて和女の身と。兩替して一兩日に吉日極め。龍田へお供仕るサア〳〵二階で酒々。吾妻はこれのお母へ能ふ禮云ふて跡からとじや。仁三此方へと手と引て奥の二階へ上りける。吾妻はつとけでんして夢見た様な事どもやな。根引にする請出すのと。取締もない潜上は。十人が十人で思はれたさに云ふと。床で帶さへ解ぬ身によもやと思ひ。頼みまするとゝ偽りしと。先は正直喜んではや談合が極まつたの。扨も胸とついたと誰にどふと談合せん。勝様からは便宜もなし。サア今でも出ると云ふ時には。泣き口説ても叶ふまい其際にならぬ先。とんと打明け云ふたらば義理詰に詰られて。思ひ切るゝとも有ると階子半分上りしが。いや〳〵ひよつと言出し先に飲込ない時は。勝二郎様のお爲まで取返しのならぬと。ア、云ふも厭なり言はねば悪し。罪深いとながら今の間にあのお人の。身に妨げも出來よのし此病が募れのし。今夜の夜が常闇と明ずにあつてくれよのし。身請の時が延したいと咎なき天にも難とつけ。歎き恨むる世の憂さ。我身ながらも浅間しやと。どんと伏て泣き沈む涙も階子と。傳ひけり。通ふ心や格子の前耳にこたゆる謠の聲。一度は榮へ一度は衰ふる理りの。誠なりける世のならひ。住所求むとて吾妻の方に吾妻の方に。吾妻〳〵と謠ひ忘れた顔つきで。我名と呼ぶは知た聲と。行燈の影のら表と見れば戀し床しの勝二郎。飛たつ様に懐しさ表には人目あり。夫から廻つてのう〳〵と指で敎へて招かれて。小暗がりとばそつと扱け。つゝと通れば縋つきなふ能ふ來て下んした。逢たふてならなんだと。しつのと抱締め泣き居たり。よい衆の果の流石にて貧苦と貧苦と思はゞこそ。此形と見てたも思へば〳〵不算用。和女の身と賣ずる程ならば三百兩もして遣て。うりへぎの百兩も手に持たがよい筈。大坂の親方へ二百兩渡さねば。井筒屋の太郎

左衛門と約束の義理が外るゝ迚。差も引もなふきつと堅ふ二百兩に賣らさいでもだんないこと。此鈍さのら此つら何にも德は無れぞも。坂田藤十郎が夕霧とま一度見たいと思ふたが。此紙子で手夕霧ゞ仕る太夫又逢に來たはいの。ヤア和女も爰で泣きやと云へば。ゝ、泣く分は夕霧に負はせまいと泣きければ。男も心しほ〳〵と可愛やゝ〳〵。物眞似に誠の涙と紛らのす。奥二階より手と拍き禿衆。吾妻樣呼ましや。吾妻樣〳〵と呼ぶ聲す。それ人が來るゝしんさ。どこへがな是々火燵へ隱れさんせと。蒲團と明れば勝二郎。此夏爰の芝居へ竹本が弟子が下つて重井筒と語つた。ヤア是のら夕霧代つて重井筒火燵の段。北濱邊のよい衆は火燵に水と入れまする。紙子一枚の我等は迚もの事に。火焙になりたいと蒲團とつて引被る。仁三郎二階より障子とあけて。申々吾妻樣。只今暦と詮索すれば明日は天社きしゆく日。萬事揃ふた大吉日銀はれ身に附てなり。何に不足ない上は善は急げ明日の朝。目出度ふ曲輪と出します筈。その用意なされませ飲ふぞ〳〵。大きな物で飲でくりよと障子引立て入にけり。火燵よりむく〳〵起今のはなんぞ。曲輪と出そとは善の惡の氣遣な聞きたいと氣とせけば。ヤアされば夫故胸と痛めると。先度の文にも云ふ通り龍田の藤が事いの。作病發しつ振つて見つ色々飽るゝ工面して。退く樣に仕掛ても煩惱の犬かして。爰の妙慶挨拶にて請出す談合極とゝると。聞くから胸が騷ぎ出し今に心が落付ぬ。どふした物で有らふやら。最早智惠にも能はぬと泣くばのりこそ力なれ。勝二郎も泣出し。扨も〳〵惡い事も續けば續くものな。五年以前に在所と出で無量の憂さに遭ふたれども。諦らめつ慰めつ心で埒と明けたるが。命のけた和女と人の物になす悲しさ。二百兩といふ大敵には。弓鉄砲も叶はぬと。齒と咬しばり歎きしが。左右云ふ間に夜が更るもふ分別は無い所。和女も死や已も死ふと若い同士は氣と嗜み。死と先立て涙と隱を歎きの色こそ哀なれ。吾妻死身と胴と据へ是申勝二郎樣。死ぬる覺悟に極まらば死なずに免るゝ思案あり。こなをんは先お歸り内と仕舞て夜中過。八ッの時分に父ぢさんせ金調へて置ませふ。其金持て丹波へ退き。來年私が年前に迎ひに來て下さんせ。心安ふて出らるゝと早ふ去でぢさんせと。呵けば勝二郎それは至極の才覺。其金は借か貰ふかどこのら出る。はて夫は構はんすな惡い樣には仕ませぬ。早ふ往でぢさんせとせがめば頷き悅んで。是ぞほんの丹波越と不道化云ふて忍び出る。氣の愚さも育のら憂事知らぬ印のや。吾妻はほんの出來心ふつゝと云ふたは

云ふたれぞ。是のうちが大事の思案火燵の櫓と談合柱。腹のつゝへだく〳〵と胸に踊ると按りさげ。二階の客と刺殺せば明日の難儀と脱る丶徳。金と取れば勝二郎様のお爲になる是が徳。是程よい事有るものゝ足元によい思案。こけて有るのが見へなんだ殺して退ふと思ひ立。目の前ばゝり背中と知らぬ女の智恵こそ果敢なけれ。夜は何時ぞ臺所は夜中と告る鼠も有り。更行く儘に恐氣立膝の慄ふと踏締〳〵。階子の口から覗いて見れゞ。客は酔て前後も知らず。仁三郎がうはき酒いき倒れては性根つのず。サテ仕済いた階子三ッ四ッ上つて見て。サテこりや何で殺そふ刄物が無い。帶と解て絞殺そふの。いや緩りとする間はあるまい煙草で燻べ殺そふの。酔て先へ此方が死ふ何として能ろふぞ。鋏刀でも剃刀でも鉄物がなと。座敷中と差足しうろ〳〵うろ〳〵尋廻り〳〵思ひ付たぞ火燵の火箸。火に焼て喉笛と貫さば。刀も同然と蒲團とあげて手と入れ。熱や〳〵と懐中の服紗に持ち添へ。陸奥の韓紅の錦木や枝珊瑚珠と焼付たり。嬉しや冷ぬ間にと立上らんとする所へ。仁三郎が母妙慶。吾妻様まだ起てのと。によろ〳〵來れば肝潰し袖の影に押隠し。サテのみ様の。私もはや寢みまする。冷ぬ間にこな様も目の寐ぬ間に暖のに。熱ふして寢やしやんせと猥狽挨拶跡先なり。妙慶更に氣も注ずお前は果報な妓様や。曲輪で繁昌仕つめて間もなふ根引の松様。千年も萬年も藤様との御中さめぬ様に遊ばせ。其いとしらしいお氣立ではさめまい〳〵。明日お目にのゝりませふと。辭義と陳て立歸れば火箸は氷と成てけり。さゝいはれぬも。炭火まで冷さつたと。吹つ煽いづ氣とせく所に。二階より仁三郎醉覺の長あくび。客の脇指持ながら目とすり〳〵階子とおり。サテ吾妻様爰にの。扨醉ましたと下に居る。吾妻脇差に心づきそれは藤様の腰の物。こなさんも先氣の通らぬ。客の刄物預るとは渡並の客のと。藤様とは女夫になり明日請出さるゝ今夜となり。心中はせまいしその儘置ていのんせと。云へどもふら〳〵居睡りながら。はて一夜でもお客の中は弓矢の禮儀はづされぬと。云ふ中に脇差の拵と膝に押へて。いのふ更たに寢まんせと。云へども拵には氣もつかず明日御見なりませふ。鹽茶と飲で寢てくれふと脇差の。鎗と持て立つ程に柄は殘れど下は見ず目はそら鞘とぶらさげてぶら〳〵勝手へ入にける。サテ〳〵有難い神佛の宛いかと。戴き〳〵ひつそばめ立て見ても後より。又誰ぞ來る様で危さ恐さ右ひだり。足もすはらぬ行燈

の我影に愕りして。わな〳〵慄ふ箱階子ぎし〳〵ぎし〳〵鳴る音も。耳にこたへ胸にしみ氣と押へ息とのみ。やう〳〵惱み登り付溜息吐たる女業。我身ながらも興醒る藤が臥たる北枕。いとしや科もない人と恐しながら背中に腹。胸先に打跨ぎ切先差あてどうと乗る乗られてふつと目と寤す。これ〳〵〳〵聲立まい。御身に恨も罪もない。仮にも惚てくれた人殺したふはないわいな。殺さるゝ御身より殺す我身が悲しいと。涙は刃に傳ひしがなふ生て置ては請出して。女夫になるが情ない私には大事の男が有る。その男と縁切れる戀路の仇となる故に。今刺殺す懐中の小判も貧な男に遣たい。殺生の罪盗の罪男の爲につくる心。少しは恨と晴れてたもと又はら〳〵と泣さければ。得心やしたりけん叶はじとや思ひけん。目と塞いで返事もせず。サア只今とぐつと刺し。止目までは手も弱り其儘捨て懐中の。小判と兩の袂に入れ階子下れば後より。掴み立たるその寒さ。寒風肌も縮み胴ぶるひ半死半生の手負。のり返つてうんといふ聲に驚き階子より。ばた〳〵どうと落椽の隅に屈んで慄ひ居る。手負は惱み苦みて。續いて階子轉落ちうめく聲に妙慶親子。家内の男女我も〳〵と駈出〳〵。ハア南無三寶藤様と切たは。切手が有らふと爰彼處尋ね探して椽端に。

人こそと引出せば是は〳〵吾妻殿。それ取放とな縛れ括れと立騒ぐ。いのにも切るも私が切り金も私が取たのちは。氣遣しやるな遁はせぬと。尤もきような白狀。先々龍田の一門衆兄御の方へ。注進とぬのるなと追々人と走らせける。勝二郎は約束の時分過ると紙子に股引。直に丹波の旅出立にて來て聞けば。吾妻が客と切たと町のもやつさ。つゝと入て是々亭主。身は江戸屋勝二郎と云ふ吾妻が男。何科なりとも同罪にしてくれと。座敷にどうぞ座しければ吾妻は泣いて目も明ず。無分別なとして思ふが仇となりましたと顔とさげてゞ居たりける。町の役人龍田より走り歸つて。手負の兄御只今是へ御出と。いふと見れば故への手代新七。木綿布子も物さびて御免あれと座敷に入り。主從顔と見合せ互にはつと驚く中。勝二郎赤面し面目なや耻かしや。其方に顔は合されぬと。兩袖と顔にあてうづくまりてゞ隠れける。新七恨の兩眼に涙と浮め大聲あげ、聞へませぬ旦那殿。我等に顔と隠さるゝは面目ないの耻しい。コレその耻しがりが遲のつた。五年以前に新七と耻のしいと思召ば。御身代は潰れませぬ。まつ斯有らふと存じた故様々の強意見。新町橋でお足にかけられ踏れながらも御意見は。親旦那の御恩の報りたさ。女房お半はお身の上と苦に致し。

氣病と煩ひ去年の春終に空しうなりました。彼めも元は御家來お主と苦にして相果るは。下人たる者の本望聊の侮も致さばこそ。親旦那のお影で少のもとで家屋敷。在所龍田の親共も餓凍へぬ程なれども。いや〳〵お主は流浪の身。家來の安樂道ならずと家屋敷田地迄で賣代なし有銀十八貫目。御覽の通り我身には碌な布子も着ぬ体ながら。親旦那の十七年忌は内證でお前から遊ばすと申なし。恐らく江戸屋の追善と笑はぬ程の法事と致し。御出世の願ひの爲京都公家方。折々の付屆油斷もなく。殘る金二百兩いとしや吾妻殿。新町の殘金もへ此所に勤と聞き。御兩人の氣と思ひやり。弟の藤五郎が請出す分で沙汰なしに。お二人一所に置ましたらば貧苦の中のお樂。高いも低いも親たる身の悦びと云ひ子の悦びお前の御機嫌よい顔と。草葉の影の親旦那に。見せましたい心ざし。御奉公の仕納と存じ立たる所に。藤五郎は吾妻殿の手にのゝつて死んだの。でのいた〳〵。此新七はお主の爲心ざしの奉公は仕たれども。一命の奉公は其方に劣つた。兄に優つた忠の者。是々御亭主只今申を通りに虚言はない。兄が言分ないと云ふ證文と致すのらは別條はあるまい。夫とても是非處の作法下手人と取るならば。水いらずに此新七女房は死ぬる親はなし。一人の弟は相果る雲のうらと尋ねても。お主より外世の中に大事の人はなきものと。隔てゝ下さる旦那殿恨めしう思ひますと。どうと伏して泣きければ。吾妻と始め亭主親子町内近所の者迄も。誠の心と感じつゝ皆々涙と流しけり。勝二郎飛で出て、過つた〳〵斯樣な身と成果たも其方と踏んだ下人の罰と。のね〳〵侮み歎いた。藤五郎と弟と知らいで吾妻が殺したも我もへぞ。主故に身上潰し其体となつたと見て。此勝二郎がいのに畜類なればとて。見ても聞てもゐられふの。死ぬるにも死なれもせず。とてもの情に其方が。此足にのけ以前そちと踏んだ樣に。勝二郎と踏んでくれ一ッの罪も脱るゝ爲。さりとては新七某と踏んでたもと。足の下に背中と向け。手と合せて泣きければ。吾妻は縋つて弟御の仇は私。刺殺して下さんせどうも生ては居にくいと。歎き悔む聲々新七は飛退り。ア、勿体ない冥加ない新七と新七と思召すが定ならば。御夫婦心と全ふして出世と見せて下されば。踏殺されても大事ないと。三人顔と差寄せて聲とばかりに泣き居たり。斯、る所に八幡の神主さのだいぶより。御吉左右の早飛脚いさり切て案内す。そりや吉左右とは悦ばしと。狀箱開くも疾し遲しと封〆切つて拜見そ。何々江戸屋勝二郎事。家來新七數年の歎き感じ思召され。關

淀鯉出世瀧德

白左右の大臣御憐愍に依て。八幡の本地舊の如く返し與へらる。退付歸宅あるべきと。讀も終らず八拜九拜悅び踊り飛上り。跳上りたる淀鯉の瀧の壺より涌出る。白銀黃金の鷄實とさは、勝鬨悅びとさ。五畿內五ヶ國神々に先願はぐさに悅びの。幣帛とあげ神樂とあげ。詣り納むる八幡山。此浪花津の惠方神氏安全こそ目出たけれ。

淀鯉出世瀧德終

明治廿五年一月廿八日印刷
明治廿五年一月廿九日出板
（戲曲叢書第十冊）
（定價金七錢）

版權所有

發行者　早矢仕民治　神田區宮本町五番地
印刷者　松本秋齋　本鄉區湯島壹丁目拾三番地
發兌元　丸屋叢書店　大坂心齋橋筋北久寶寺町
全　武藏屋叢書閣　神田區宮本町五番地

賣捌書肆

神田南神保町　松江堂
神田裏神保町　黑雲堂
神田淡路町　上田屋支店
京橋彌左衛門町　嚴々堂
京橋尾張町　東海堂
芝南佐久間町　栗ばら
神田區表神保町　中西屋

日本橋通三丁目　丸善書店
本鄉區元富士町　盛春堂
本鄉四丁目　文壽堂
神田錦町一丁目　武藏屋
神田錦町三丁目　朝陽堂
横濱　丸屋書店
京都　大黑屋

同　便利堂
横濱吉田町　有隣堂
京都　文林堂
大坂　博聞分社
神戶　吉岡書店
久榮堂

弊店出版の戲曲小說類に付御注告或は御尋問等被成下候諸君にして往々匿名の御狀有之候て御答申上候事も難出來誠に不本意の至りに存候間何卒御本名住所等御認有之度候

口上

●近松世話淨瑠璃全部完成

著作年代ハ外題年鑑ニ依ル

○長町女腹切　元錄十三年正月六日
○淀鯉出世滝徳　同　年四月八日
○曾根崎心中　同　十六年五月七日
○源五兵衛小まん薩摩歌　同十七年正月十五日
○徳兵衛おふさ心中重井筒　寶永元年四月十六日
○五十年忌哥念佛　同二年十一月廿一日
○心中二枚書雙紙　同三年　三月廿七日
○蔦兵衛おさん戀八卦柱暦　同　年九月廿一日
○堀川浪の鼓　同　四年二月十五日
○與兵衛おかめ卯月の紅葉　同　年四月廿一日
○伊達染手綱　同　年六月廿四日
○桑之助おむめ心中萬年草　同　五年四月十六日
○二郎兵衛おさき今宮心中　寶永七年正月廿三日
○心中刀は氷の朔日　同　年六月十六日
○夕霧阿波鳴渡　同　年七月廿四日
○梅川忠兵衛冥途飛脚　同　八年三月五日
○生玉心中　正德五年八月
○鎗の權三重帷子　享保二年八月廿二日
○山崎與次兵衛壽門松　同　三年正月　二日
○博多小女郎浪枕　同　年十一月二十日
○治兵衛小はる心中天の網島　同　五年十二月六日
○女殺油地獄　同　六年七月十五日
○心中宵庚申　同　七年四月廿二日

以上廿三種

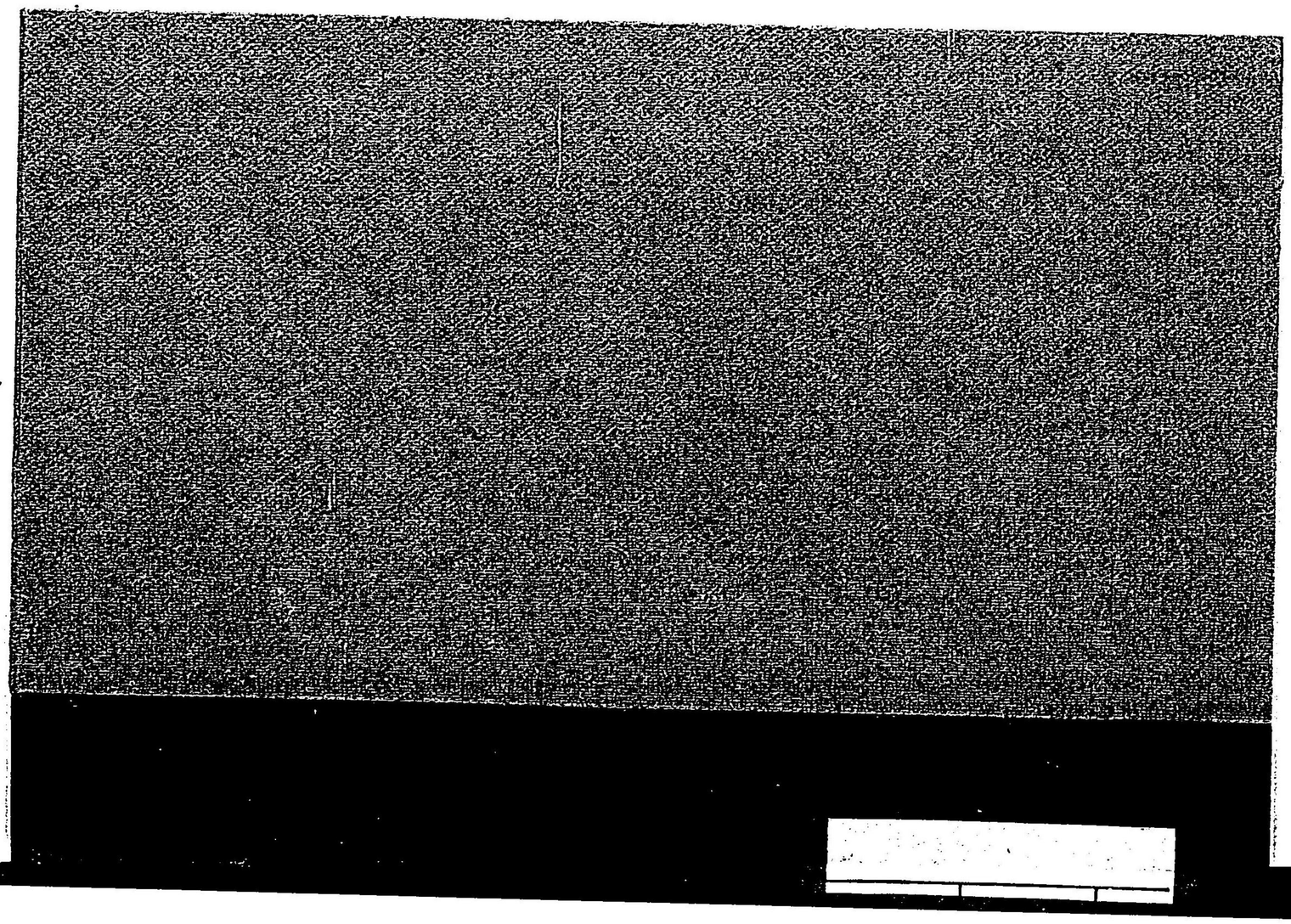
詩の最も進みたるドラマと日本に求むれば唯此近松世話淨瑠璃あるのみ

日本文學の眞相と知らむとするに最も適切なるは唯此近松世話淨瑠璃あるのみ

ナK-18

世話物

メ 12冊



長町女腹切
淀鯉出世滝徳

国立国会図書館

912.4
Ti238n

088324-000-4

912.4-Ti238n

長町女腹切・淀鯉出世滝徳

近松　門左衛門／著

M25

DBI-0162